

# ワーズワスが「未刊行の旅行案内」で目指したもの

小 田 友 弥  
(英文学)

## I

ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) の『湖水案内』の出版に至るまでの経緯には複雑なところがある。通常我々が彼の『湖水案内』と呼んでいるのは、1835年に刊行された *A Guide through the District of the Lakes in the North of England* である。だがそれ以前に彼は、『湖水案内』と内容的に相当重なるものを以下のように4回出版している。ウィルキンソン師 (Joseph Wilkinson, 1764-1831) は1810年に48枚の版画を『選り抜きの光景』(*Select Views of Cumberland, Westmoreland, and Lancashire*) という題名で出版したが、『湖水案内』の初版は、この版画集に付随する文章として出版された。次にワーズワスは1820年に、1810年の文をウィルキンソンの版画から分離し、自身の『ダドン川ソネット連作、など』(*The River Duddon, a Series of Sonnets: Vaudracour and Julia: and Other Poems*) に「湖水地方の地誌的叙述」(“Topographical Description of the Country of the Lakes in the North of England”) という題名を付けて出版した。これが第2版である。さらに彼は1822年とその翌年に、湖水地方に関する文章を独立させ、『湖水地方の風景の叙述』(*A Description of the Scenery of the Lakes in the North of England*) という書名で刊行している。これらが第3版と4版になるわけである。

『湖水案内』のこれら五つの版にはそれぞれ特徴があり、湖水地方を大衆に紹介するにあたってのワーズワスの姿勢が様ではなかったことが窺われる。『湖水案内』に関係する原稿のなかにも、彼のこうした心の動きを探る上で重要なものが存在している。その原稿は初版と第2版の間に書かれたと想定され、オックスフォード大学出版局版『ワーズワス散文集』の編纂者により「未刊行の旅行案内」(“An Unpublished Tour,” 以下「未刊の案内」と略記) と名付けられている。<sup>1</sup> だが私の知る限り、この「未刊の案内」をワーズワスの『湖水案内』の創作意図との関連で取り上げる研究は、これまでなされていない。以上のような状況を踏まえて本論は、「未刊の案内」を『湖水案内』の他の版や、18世紀後半から19世紀にかけて出版された旅行案内書などと比較し、ワーズワスがこの案内で目指したことを明らかにしながら、彼がその出版を思いとどまった理由について考察する。

## II

ワーズワスが何時、どのような経緯で湖水地方案内書を書くことを思い立ったのかは、正確にはわかっていない。彼は1806年5月に、ロンドンでホランド卿夫妻の知己を得ている。夫妻は翌年8月に湖水地方を訪れワーズワスに会っているが、その際の会話内容を記録した夫人の日記によれば、彼は湖水地方旅行者用のガイドを準備していると語っている。<sup>2</sup>しかしワーズワスがこの時点で、どの程度案内書執筆に着手していたのかは不明である。現在ある程度分かっているのは『湖水案内』の初版に位置づけられる『選り抜きの光景』執筆の経緯以降である。

1804年までスキドー（Skiddaw）山麓で生活していたウィルキンソン師は、自分が描いた湖水地方の風景の版画を出版することを思い立ち、1809年に知人であったワーズワスに説明文の執筆を依頼した。この依頼は必ずしもワーズワスの意に沿うものではなかったが、経済的理由もあり、ウィルキンソンの申し出に応じるようになった。こうして世に出ることになった初版は「導入部」（“Introduction,” i-xxxiv）、「第Ⅰ部」（“Section I,” 35-6）、「第Ⅱ部」（“Section II,” 37-46）からなり、その後ウィルキンソンの48枚の版画が続いている。湖水地方の地形の骨格と、景観と人間の歴史的関わり（そして景観に対する人間の責務）を扱った「導入部」は『湖水案内』の核心で、第5版では「自然により形成された景観」、「住民の影響により形成されたこの地方の様相」、「変化とその悪影響を防ぐための趣味の規則」に分けられるが、この部分には初版から第5版まで趣旨に大きな変化が見られない。他方、「第Ⅰ部」と「第Ⅱ部」は実際の旅行の手引きに相当するが、この部分は初版とそれ以降の版で差異があり、本論の焦点である「未刊の案内」と深く関わるので、以下ではこの部分の内容を紹介していく。<sup>3</sup>引用などの末尾の数字は初版のページである。なお、以下では本論のテーマと関連し、後に取り上げたいと思う箇所に、（§ 3）のような符合をつけていく。

「第Ⅰ部」は35ページから始まる。冒頭でワーズワスは「導入部」で述べたことは、旅行者のみならずこの地方の住人にも役に立つだろうと言う。彼らが見逃したり意識しなかったことも、そこに含まれていると考えられるからである。（§ 1）だが以後は、初めてこの地方を訪れることを計画する旅行者を念頭に、通常案内書のフォーマットや後続の版画に縛られず、景色に新たな価値を添えることを伝えていきたいと言う（35）。（§ 2）このように前置きしてワーズワスは、この地方を訪れるのに適した時期について語る。『ファーンズの古事』（*The Antiquities of Furness*, 1774）の著者ウェスト（Thomas West, c. 1720-79）は、書名に初めて“guide”という語を組み込んだ『湖水地方旅行案内』（*A Guide to the Lakes*）を1778年に出版している。この書は、各湖ごとにすぐれた景観に接することができる場所を眺望点（station）として設定するなど、旅行案内として優れた特徴を持っていたので読者に歓迎され、1821年までに11版を重ねることになった。この書でウェストは6月から8月を勧めてい

るが、ワーズワスは幾つかの理由をあげて9月初めを推奨する(35-6)。「第Ⅰ部」はここまで述べたところで、いささか唐突に終わっている。

ワーズワスは「第Ⅱ部」を、“It is obvious that the point, from which a Stranger should begin this Tour, and the order in which it will be convenient to him to see the different Vales will depend upon this circumstance; viz: from what quarter of the Island he comes.”と開始し、湖水地方の主な景観をルートに沿って説明している。この部分では最初にどのような原理で見物コースを設定すべきかが取り上げられる。前述の案内書でウェストは、自然景観を訪ねるにあたっては穏やかなものから峻厳なものへ、湖尻から湖頭へと進むべきだと唱えている。ワーズワスはこの考えに賛意を示し、ランカスター砂州路(“Lancaster Sands”)からコニストン湖(Coniston)へと進む。そして最初に、コニストンからダドソン川(Duddon)溪谷などへの遠出コースを説明する。そこでのアルファ・カーク(Ulpha Kirk)の記述は“from this Church-yard he will have as grand a combination of mountain lines and forms as perhaps this country furnishes. The whole scene is inspirited by the sound and sight of the River rolling immediately below the steep ground upon the top of which the Church stands.”(37)のみである。(§3)次にユウ・デイル(Yew Dale)などのコニストン周辺コース(37-8)を紹介後、ウィンドミア(Windermere)西岸の船着場へと向う。ウィンドミアへの入り方として、このコースはケンダル(Kendal)から東岸のボウネス(Bowness)に出るコースより劣る。だがケンダルからのコースをとるにしても、ウェストがウィンドミアに定めた第1眺望点に建てられた別荘がまず目に入ってくる。ワーズワスはその出現を、湖水地方での悪しき景観改良の典型と見て“he, who remembers the spot on which this building stands, and the immediate surrounding grounds as they were less than thirty years ago, will sigh for the coming of that day when Art, through every rank of society, shall be taught to have more reverence for nature.”(38)のように嘆く。(§4)この眺望点は、ワーズワスが少年時代に再三足を運んだ地点であり、引用の“he”には彼自身の心情が託されていると想定して誤りではないであろう。なお、ここでワーズワスはウィンドミアへの二つのコースに言及しているが、通常の旅行者が採用するのはケンダルからボウネスの方である。にも拘らずここでワーズワスは、原理に忠実に砂州路から湖水地方に入り、コニストンに進むルートを推奨していることは忘れてならない点であろう。

ここでワーズワスはこの書の執筆意図に触れ、彼は“scenes which lie apart from the beaten course of observation”(38)を提示することを目指しているので、旅行者がよく目にするような景観ではなく、普段目にすることができないような光景を扱っていく、と言う。(§5)この観点からすれば、過去35年間にボウネス周辺でなされた景観改良は、「導入部」で説明した趣味の規範、建築や植林の望ましい方法に合致していない。彼はその典型としてベル・アイ

ル (Belle Isle) の、外来の木々を植えて護岸を固める悪しき景観変更を告発する (38)。(§ 6) ウィンダミアについては、この湖には湖上にも陸路にも見所が多いことを指摘した後、島々を見物するには明るく波の穏やかな夕暮れがよいこと、ボウネスから湖頭に向って歩くことの素晴らしさなどを伝授している (39)。

湖頭の町アンブルサイド (Ambleside) には以前、“a combination of rustic architecture and natural scenery” (39) があり、豊かなピクチャレスク美に接することができた。だが、残念ながら現在では趣のある建物が取り壊され、現代的なものに建て替えられている。しかしワーズワスは、ピクチャレスクなものも依然残っているとして、その見所の紹介に努めている。(§ 7) さらに、アンブルサイドを基点にしたラングデイル (Langdale) 溪谷やブリ・ターン (Blea Tarn)、ライダル (Rydal) からグラスミア (Grasmere) への散策路など、通常の旅行者が訪れない所を詳しく紹介している (40-41)。だが初版での、アンブルサイドからライダル、グラスミアを通過してケジック (Keswick) に至る湖水地方旅行のメインロードの説明は極めて簡単で、ウェストの案内書などと著しい対照をなしている。(§ 8)

ケジックを扱うにあたってワーズワスは、この谷の全体像はブラウン (John Brown, 1715-66) やグレイ (Thomas Gray, 1716-71) によって与えられているので、同じことを繰り返すことはやらないと宣言する (41)。彼が読者に提示するのは、収録されている版画に描かれているような通常人目に触れない場所だと述べて、版画の22、23、24番に取り上げられた景色と、ダーウェント (Derwent) 湖東岸から湖頭のボロウデイル (Borrowdale) 近辺の景観の魅力を詳しく取り上げている。(§ 9) ただボロウデイルの多様性を言葉で表そうとすると際限がないので、荒々しい自然さを持った岩石や森と、それらに溶け込むようなコテージ、そしてコテージ近くによく見られる大イチイなどに触れて、記述を締めくくっている。

ワーズワスはバッセンスウェイト湖 (Bassenthwaite) とその周辺について語ってから、42-5 ページでバタミア (Buttermere)、クラマック (Crummock)、ワズデイル (Wastdale) などの湖水地方最深部を取り上げる。彼はバタミアへの三つのルートを紹介し、クラマック湖上の眺めを推奨するなどしているが、その内容から彼がこの地に詳しいことが自ずと浮かび上がってくる。一例としてスケイル・フォース (Scale Force) を描いた文をあげてみよう。

The Fall is perpendicular from an immense height, a slender stream faintly illuminating a gloomy fissure. This spot is never seen to more advantage than when it happens, that, while you are looking up through the Chasm towards the summit of the lofty Waterfal (sic), large fleecy clouds, of dazzling brightness, suddenly ascend into view, and disappear silently upon the wind. (42-3)

## ワーズワスが「未刊行の旅行案内」で目指したもの

恐らくワーズワスはここで、白く糸を引く滝の流れと白雲の相乗効果に触れているのだろうが、そのような稀な眺めに気付くのは、鋭い感受性を持って再三この地を訪れることができる人物だけであろう。(§ 10) さらに彼はエナーデイル (Ennerdale) からコールダー (Calder) への道を辿り、途中のワスト・ウォーターやその東岸の岩屑地帯 (screes) などかなり詳しく述べている。そしてワズデイル湖頭部のもてなしのよい住民たちやスコーフエル、グレート・ゲイブルの眺め、後者山頂の枯れることのない水飲み場などの細かなことにも丁寧に触れている。以上に続き、スタイヘッド (Stye head)、ボロウデイルを経てケジックにもどることになる。

初版の最後の部分44-6 ページではアルズウォーター (Ullswater) が取り上げられる。ワーズワスはこの湖への二つのルートを紹介してから、ケジックの場合と同様に、大多数がまわる湖の観光スポットではなく、湖に注ぐ両岸の谷筋について語っていく。(§ 11) そしてまず西岸の谷筋から取り上げていくが、その中には、例えばグライズデイル (Grisedale) からグラスミアに抜ける道筋についての “as we climb almost immediately under the projecting masses of Helvellyn, the mind is overcome with a sensation, which in some would amount to personal fear, and cannot but be awful even to those who are most familiar with the images of duration, and power, and other kindred influences, by which mountainous countries controul or exalt the imaginations of men.” (45) のような、崇高な実景に圧倒されたような描写がある。(§ 12) 彼はまた、ブラザーズ・ウォーター湖 (Brothers Water) 付近の通常の旅行者が知らない場所も熱心に説明している。東岸では、谷筋を紹介する中で、ブロウィック (Blowick) の森林伐採を強く非難している。(§ 13)

以上の谷筋の紹介に続き、ラウザー城近辺の大樹への言及がある。「第Ⅱ部」の最後で、これまで通常の旅行者が辿ると違うルートを取り上げてきたのは、付随する版画の精神に合わせてのことだと述べている。そして愚かな趣味の持ち主が、旅行者が訪れやすい場所から本来の美しさを奪う行為を止めなければ、版画に描かれた景色が一層貴重になる日も近いだろうと、警告とも懸念ともとれる発言で終えている。

これまで述べてきたことから、『湖水案内』初版の特徴をあげてみる。ワーズワスは「第Ⅰ部」で代表的な案内書の著者であるウェストに賛意を表し、「第Ⅱ部」では彼が推薦する道程で湖水地方を巡っている。この点でワーズワスはこの地方旅行の原則に従っているように思われる。しかしながら彼の個々の地点の取り上げ方には、ウェストの書とはなじまない次の3点ような特徴があると思われる。

A1) これまでの旅行案内書、さらには同じ書に収められたウィルキンソンの版画にも縛られないという姿勢を見せている (§ 2、7、8)。

A2) 従来の案内書で扱われなかったところ (“scenes which lie apart from the beaten course

- of observation,” 38) を紹介することを旨とし、眺望点などへの言及がない (§ 1、5、9、11)。
- A3) 個人的な感情・信条や体験を表現している (§ 4、6、7、10、12、13)。このなかには4や6のように、現代の自然保護思想に連なると思われる先駆的な考えも含まれている。

### III

この章では「未刊の案内」を概略しながら、その特徴の把握に努める。その過程で、本論のテーマと関連し、後に取り上げたいと思う箇所には(\*5)のような符合をつけていくことにする。なお、「未刊の案内」のテキストとしてはオックスフォード版『ワーズワス散文集』第2巻287-348ページに収録されているものを使用した。引用の末尾などの数字は、このテキストに付けられている行数である。

「未刊の案内」は “It is obvious that the point, from which a Stranger should begin this Tour, and the order in which it will be convenient to him to see the different Vales will depend upon this circumstance: from what quarter of the Island he comes.” (2-5)で始まっている。(\*1) これは初版の「第II部」と同じ書き出しであり、ここには「導入部」に相当するものがない。そして以下92行まで南や北から湖水地方に入る場合の、道中にある見所が紹介されている。この部分は第5版冒頭(オックスフォード版『ワーズワス散文集』第2巻に収録されたテキストの16-72行)の原型と見なすことができる。さらに、湖水地方を訪れる多くの人がランカスターを通過することから、この町の説明に200行までを費やしている。この説明は城の改修への批判など、通常案内書には見られない視点からなされている。(\*2)

202行からはランカスター砂州路とファーネス修道院の紹介に移る。ワーズワスはウェストに賛成して砂州路から湖水地方に入ることを推奨する。こうすることにより旅行者はコンiston湖を湖尻から湖頭へと辿ることができるし、世間の煩わしさを忘れて別世界に入るような気分も味わえるのである。次に、湖の景色に接するには湖尻から湖頭へと進むべきことを一般論として主張し、読者は「導入部」を読むことで、こうした考えに到達しているかもしれない、と述べている(218-222)。(\*3) これはワーズワスが、「未刊の案内」の原稿には「導入部」がないにもかかわらず、その存在を前提としながらを書いていることを示唆している。

砂州路を渡ってから旅行者が足を向けるのがファーネス修道院跡である。ワーズワスは230行からこの修道院跡を扱う。そして、ここについてはウェストから引いた注釈を見るようにとだけ言っているが、この注釈に該当するものは存在していない。(\*4) 彼は、自分がこの修道院跡に接してきたわずかの期間にも建物の荒廃が進んだことを、ファウンテンズ修道院をうたった詩行をあげながら悼んでいる(234-85)。286行からは、この修道院に隠されてい

ワーズワスが「未刊行の旅行案内」で目指したもの

たとされる財宝探しとそれに携わったものの末路が紹介され、こうした伝説的な物語の意味合いについて考察される。(＊5) 307行からの段落では、ウェストの『ファーネスの古事』に倣い、ファーネス修道院は海と山に守られスコットランドからの襲撃もない肥沃の土地に位置しているので隠遁生活に好適であると述べてから、この地の自然が修道僧の精神に及ぼす影響に思いを巡らしている。(＊6)

358行からはコニストンからドナーデイル (Donnerdale) への一日の遠出コースが紹介される。ワーズワスが提示するのは“out of the beaten track” (370) だが、それを彼は自信を持って勧めることができると言う。(＊7) この遠出はコニストンから険しい道を通りシースウェイト (Seathwaite) に出る。ワーズワスはその地の9月のすばらしさを詳細に描写しているが、それ以上によいのがこの地のコテージだとして、次のように描写している。

The cottages in some places peep out from under the rocks hung with trees, like hermitages whose scite has been chosen for the benefit of sun-shine as well as shelter; in other instances, the dwelling house, combining with the barn & byer, makes a cruciform structure, which, with the foliage that embowers & the plants & mosses that encrust it, calls to mind the sanctity which is felt on beholding the remains of ancient abbeys. Time in most instances, & Nature every where, has consecrated the humble works of man that are sprinkled over this peaceful valley : hence, a perfection & consummation of a beauty which could not have been realized if aim or purpose which would have marred [?] [? had] interfered with the course of convenience, utility, or necessity. (395-405)

これは、長年の自然の作用を受けて、この地方の住居が自然に溶け込むような、利便性のみを追求する営みからは生じようがない様相を帯びていることを指摘しており、ワーズワスの考えがよく表れている。(＊8) だが、このあたりの文は、第2版が収録された『ダドン川ソネット連作、など』の43-5ページに移され、以後『湖水案内』のテキストにはもどらない。

次にワーズワスはシースウェイト小教会とそこで長年副牧師を勤めたウォーカー師 (Robert Walker, 1709-1802) について述べる (424-42)。ウォーカー師はワーズワスが理想とする人物で、『ダドン川ソネット連作、など』では、48ページから68ページまで20ページに及ぶ彼の生涯の記述を加えることになる。<sup>4</sup> 続くアルファ・カークの教会墓地に関する部分では、墓碑銘を引用しての記述がなされており (459-76)、初版にはない部分が相当含まれている。(＊9)

この地域には“Sunken Church” (481) と呼ばれるストーン・サークルがあり、そこに至る道を一歩進むとマン島からスコットランドの山岳地までが見渡せる丘に出る。ワーズワス

の記述は、このように視界が突然開けるまでの過程を、それを味わう者の心理の分析を含めながら追っている。（\*10）そこから話はブラック・クーム (Black Combe) 山頂の眺めに及ぶ。彼はそれを詩行を引用して説明するつもりだったが、引用は記入されていない。<sup>5</sup>（\*11）

543-57行ではまずコニストン湖への帰路が示され、次にこの湖周辺での二日目の予定が、ボートで湖を周遊することと、ユー・デイルやティルバースウェイト (Tilberthwaite) などの散策の二つに分けて予告されている。そして559行からの部分では午前中になすべきこととしてボートでの周遊があげられる。湖を朝に周航するのは、見るべきものが西岸にあるので、午前中の方が具合がよいからである。この説明の過程でワーズワスは、朝の景色のすばらしさを思えば、早起きも苦にならないだろうといった都会人への皮肉や、この地方の名の知れた地点ばかりを急いで渡り歩くことは“the prolongation of the labour of vanity” (611) に過ぎない、といった批判を交えている。（\*12）

ワーズワスがあげる見物の一つは、湖水地方の名門であるフレミング家の廃墟となった旧宅コニストン・ホールである。ここは湖水地方へのピクチャレスク旅行の重要なスポットになっていた。ウェストはこの建物周囲の景観を、コニストンの三つの眺望点の一つに指定し、『湖水地方旅行案内』の第3版 (1784) で次のように描写している。

Look for a fragment of dark coloured rock on the margin of the water, and near it will be found the best stand for the artist to take the finest view on the lake. Looking across the lake, by the south end of the grove that conceals Coniston-hall, and over the cultivated tract that rises behind it, between two swells of rocks, a cataract will meet the eye, issuing from the bosom of the mountains. The side ground, on the right is wooded, sloping rock, and over it the road is caught along. The near fore-ground is the greatest extent of the lake; and behind the immediate mountains, the Westmorland fells are towering to the clouds. (50)

ここでウェストは最初に眺望点への目印を提示している。次に遠景として滝とともにコニストン・ホールをあげ、側面の森に道、近景の湖と、人工物と自然を巧みに配しながら提示している。こうした景観の提示方法と、“side ground,” “fore-ground”などの語から窺われるように、これはピクチャレスク式の情景描写の典型である。ただ、ここでは風景は叙述されているが、それに接しているウェスト自身の心情などは伝わってこない。

それに対してワーズワスはまず、スコットランドの湖には廃城のような、ロマンティックな飾りとなる建物が近辺にあるが、湖水地方の湖には殆どないと述べ、690-700行では湖水地方にグラスミア・アベイという架空の廃墟を想像する、『エセリンダ』(Ethelinde) でのシャー



ワーズワスが「未刊行の旅行案内」で目指したもの

ロット・スミス (Charlotte Smith, 1749-1806) のような夢想的姿勢に疑問を投げかけている。そしてコニストン・ホールについて次のように発言している。

Its (Conistone Hall's) luxuriant hangings of ivy are cropped every winter by the farmer who inhabits the mansion, & distributed to his sheep, the sickly or feeble probably being preferred, as it is a species of food which browsing animals are fond of & is supposed to have a healing virtue. Many will join me in wishing it were generally known that so beautiful a production may thus be made part of the farmer's annual dependence for winter nourishment. (701-707)

ここでワーズワスは、フレミング家が去った後のホールに起居する農夫が、建物を覆うツタを弱った羊に与え、それが効果的であることに着目している。彼の叙述は住民の実相をリアルにとらえており、光景の視覚的側面にのみ注目しているウェストとは対照的である。(＊13) 彼のこうした姿勢は、午後のユー・デイルなどの散策でも維持されており、通常の旅行案内が殆ど取り上げない、スレートの採石場などの写実的記述に多くのページが割かれている。また、スレート葺きの屋根についての見解も独特である。最近は技術革新によりスレートが薄くなったが、これは景観にとって必ずしもよいことではない。厚い場合はスレートにコケなどが生え、人間の住居が岩や木々と一体化するが、薄い場合はそうはいかないからである。しかしワーズワスは、こうしたことの良し悪しはピクチャレスクだけから論じられるべきものではないと述べ、薄いスレートにも一定の理解を示している (958-71)。(＊14)

陸路の散策からの帰路、コニストンのすばらしい眺めが突然視野に入ってくる丘が紹介される。ワーズワスは、読者が案内書などから情報や予備知識を得ることなしにここを訪れることができれば理想的だと思う。そうした情報の類は、旅行者に先入観を与え、彼の景観などへの反応を方向付けてしまうからだ。(＊15) しかしこれは必要悪で、予備知識がないために見逃すよりはましかもしれない。このように言う前からワーズワスは、この地点を発見するのに30年以上かかったという自身の経験を披瀝している(1077-88)。(＊16)

1106-1591行ではホークスヘッド (Hawkshead) からウィンダミアへの道が辿られている。1118行以下では、ホークスヘッドへの道中にある住居に見られるトピアリを批判している。また1130行以下では、美しい景観を無視するように建てられている住居を目にして、“a relish for fine combinations of Landscape is assuredly an acquired taste.” (1136-7)と、1844年の「ケンドルーウィンダミア間鉄道敷設反対論」に見られる考えの先触れのようなことを言っている。(＊17) 1170-75行には、初版の「導入部」への言及がある。(＊18)

1187行からホークスヘッドの谷へと入っていく。最初に取り上げられるのは再洗礼派の礼

拝堂と、この派の一教徒の失踪と死（1205-35）である。続いてホークスヘッドの教会(1236-40)とファーネス修道院が使っていたホークスヘッド・ホール（1241-48）が説明される。このうち、ホークスヘッド・ホールに関する1244-48行はウェストの『ファーネスの古事』にならったものである。（\*19）なお、1248行と次行のあいだには挿入があり、そこでワーズワスは、ホークスヘッドの町並みは眺めがよくないので、木々が必要だと言っている。（\*20）

1249行以下ではまず、ホークスヘッドの教会が取り上げられるが、教会は1236-40行で一度言及されているので、ちぐはぐな印象を与える。（\*21）続いてワーズワスはヨーク大主教エドウィン・サンディズ（Edwin Sandys, 1516-88）と彼の設立した文法学校や、この地区ではヘンリー八世の宗教改革が簡単には受け容れられなかったこと、教会の東側に石造の椅子があり、そこから老人が生徒が遊ぶのを眺めていたことなどを取り上げる。そして彼が椅子に言及するのは、自分がここで10年間学んだからだと言って、この地にまつわる心情を吐露している(1320-24)。（\*22）ホークスヘッドの叙述はさらに、教会墓地に横たわる才女エリザベス・スミス（Elizabeth Smith, 1776-1806）についてや、エススウェイト湖（Esthwaite）近くの処刑台(1397-1408)、イチイの木があった囲い地(1466-84)など細かなことにも及んでいる。<sup>9</sup>（\*23）

「未刊の案内」の1592行からはボロウデイルの説明が開始されるが、ここでも湖水地方旅行のメイン・ロードであるウィンダミアからケジックまでの道中に言及がない。ただ『ワーズワス散文集』では1591行と2行の間に追加された文が載せられており、そこではこの道中で旅行業に携わる人々の旅行者に接する態度が皮肉とユーモアを交えて描かれている。（\*24）ボロウデイルの記述はティックル(Thomas Tickell, 1686-1740)の“To a Lady before Marriage”17-22行の引用から始まっている。この詩では男が恋する女性に、二人で田舎で暮らそうと提案する。しかし素朴な農夫が一生離れることがないようにすばらしい村はどこかにあるのだろうか。ティックルから引用された詩行はこのような問いかけになっている。それに対してワーズワスは、ボロウデイルを見たらその答えは自明であると反論し、このやりとりによりボロウデイルのすばらしさを浮かび上がらせている。（\*25）次にダニエル（Samuel Daniel, ?1563-1619）から10行引いてから、グレイが入っていくことを恐れたボロウデイルからは、ケジックに出るのもままならなかったことが語られる（1633-1651）。ボロウデイルはこのように世間から離れた奥地なためにその住民がおろかか有名なことが、クラーク（James Clarke）の『湖水地方概観』(A Survey of the Lakes of Cumberland, Westmorland, and Lancashire, 1787)からとったと思われる小話をあげて紹介している。（\*26）

1668行からは、『多幸の国』(Poly-Olbion)の著者ドレイトン（Michael Drayton, 1563-1631）が、仮にボロウデイルを中心にすえて“the proudest of Albion”（1670）と競わせたら、ボロウデイル内に位置するロススウェイト（Rosthwaite）やシースウェイト<sup>7</sup>が、この谷のために弁

## ワーズワスが「未刊行の旅行案内」で目指したもの

論に立つだろうと述べ、主だった場所を紹介するのに新たな趣向を凝らしている。また、この地域の教会区戸籍簿に、海岸の町で死んだこの地出身の若者が、自分が学んだ教会兼学校に埋葬するよう願ったことが記録されていることも紹介されている(1715-25)。このようにワーズワスの記述は多くの角度からなされており、多彩で興味をそそるものとなっている。ボロウデイルの人々に関しては前述の「おろか者」も含めて幾つかの典型的住民像があるが、賭け事好きというのもその一つである。ワーズワスは1726-54行でこうした住民の姿を描き、最終段落の1755-87行でその理由とされるものを提示している。この谷で産出される黒鉛は高価なので、それを盗むものが絶えなかった。そのために住民の道徳心が鈍ったというのである>(\*27) ここでは住民像と産物を結び付けた一種の物語により、読者の興味を逸らさない巧みなボロウデイル紹介がなされている。

以上が「未刊の案内」の概容だが、その特徴を以下のような6項目に要約できる。

- B1) 外部から訪れる人のために、92行までなされている湖水地方への入り方とその径路にある見逃せない景観などの紹介。
- B2) 「未刊の案内」が未完成なことを窺わせる内容。
- 扱っているのがファーネス、コニストン、ホークスヘッド、ボロウデイルの四ヶ所しかない。
  - 初版の「導入部」など、「未刊の案内」の原稿以外のものの存在を前提にした書き方>(\*1、3、4、11、18)
  - 一度説明した場所を再度取り上げるようなちぐはぐな内容>(\*20、21)
- B3) 先行案内書を研究した形跡>(\*19、25、26)
- B4) ものを見る視点が独特で、読者に紹介する地点が通常の案内書とは異なる(“out of the beaten track,” 370)。ワーズワスは湖水地方について極めて博識だし、案内書の類も相当に読んでいる。また湖水地方を扱う文学にも精通している。そのことが「未刊の案内」に類書とは異なる視点や内容を与えている>(\*2、5、7、23、27)
- B5) 従来の案内書に対する批判と類書には縛られまいとする姿勢>(\*8、13)
- B6) 個人的体験や考え方の披瀝>(\*6、10、12、14、16、17、22、24)

## IV

この章では初版の「第Ⅰ部」と「第Ⅱ部」にあたる部分が第2版と3版でどのように扱われているかを概観する。後に取り上げる点には(＃3)のような符合をつけていく。

『ダドン川ソネット連作、など』の213ページから321ページに収められた第2版のうち、309ページまでは初版の「導入部」に相当している。310ページから316ページの最初の段落までは初版の「第Ⅰ部」に対応し、湖水地方を訪れるのに適した季節が論じられている。316

ページ後半では湖水地方を回る道順が取り上げられており、「第Ⅱ部」の冒頭にこれに対応する箇所がある。初版ではそれに続いて、湖水地方の個々の地点などが取り上げられているが、第2版ではそれが削除されている。代りにワーズワスは、湖水地方の景観に臨む時の心構えを読者に説き、この地方を他の景勝地と比較すべきではないという主張を展開している。例えばアルプスと湖水地方の比較はよく耳にするところだが、かの地のような光景を期待してこの地を訪れば、ここの山や谷、滝や奔流が、崇高さの点で劣るのに失望するであろう。訪問者は、与えられた景色を素直に受け入れる気持ちで臨まなければ、この地の景観の「構成要素間の調和の素晴らしさ」（“A happy proportion of component parts,” 114）に気付くことができない。だがまさにこの点こそが、規模ではスコットランドやアルプスに劣る湖水地方の景色の長所なのである。（#1）ここで第2版は終わっている。このように第2版での旅行者向けの情報に相当する部分は、初版と比べてもかなり少ない。これは第2版が詩集の最後に付せられたもので、旅行者の使用を前提にすることができなかつたという事情によるものと推定される。

第3版では初版の「導入部」を衣更えした「自然により形成された景観」、「住民の影響を受けたこの地方の姿」、「変化とその悪影響を防ぐためのよき趣味のありかた」の三つのセクション（1-101）があり、その後に「種々の留意点」（“Miscellaneous Observations,” 102-136）が配置されている。<sup>8</sup> その冒頭では湖水地方を訪れるのに適した季節が論じられており、その内容は初版の「第Ⅰ部」を引き継いでいる。次にはコースの選定が取り上げられているが、これは初版の「第Ⅱ部」冒頭と要旨が一致している。続いて彼は山上の霧や、日差しを考慮した山腹の歩き方などに関する助言をし、さらには湖水地方の景観に臨む時の心構えを読者に説き、湖水地方を他の景勝地と比較すべきではないという主張をアルプスを例に挙げて展開している。これは第2版で追加された点の踏襲である。第3版でワーズワスは、第2版のアルプスに触れたこの部分を前置きにして、読者にはなすべきではないと伝えたアルプスと湖水地方の景観比較を、自身が試みる。（#2）そして自分の主張を裏付けるものとしてウェストの見解を引きながら（128-9）、後者の優位性を立証しようとしている。こうした外国のものに対するイギリスの景観の卓越性の主張は、ウェストが引き合いに出されていることから窺われるように、当時の旅行書にかなり見られるものであった。ワーズワスの結論には、景観の優劣は高さや広さを示す絶対的な数値ではなく、多様な構成要素の組み合わせと調和によるべきだという考えが反映されているとも言えるが、湖水地方に有利になるように評価基準を設定している感も否めない。なおワーズワスは、1820年の7月から11月のヨーロッパ旅行の際にアルプスも巡っており、その体験がここに反映されている。続く箇所には、ワーズワスの案内書執筆の意図に関わる記述がある。それによれば、数年前に彼は適切な道順で、湖水地方を紹介する正規の案内書を書くことに着手した。しかし旅行に関する情報は、予備

## ワーズワスが「未刊行の旅行案内」で目指したもの

知識を与えたり期待を高めることで、旅行者が実景に接する時の喜びを損なう可能性があるなどの理由で、彼はこの企画を放棄したというのである(129)。(＃3)

「種々の留意点」の最後には、ドロシーが1818年10月21日にウィリアム・ジョンソンに宛てた手紙<sup>9</sup>をもとにしたスコーフェル(“Scaw-fell”)登山の記録が収められている。既に見たように、初版でワーズワスはグレート・ゲイブル山頂の枯れることのない水のみ場に言及しているが、第3版ではその記述をここに移している。

第3版の最終セクションは、137-56ページの「旅行者の心得事項と情報」(“Directions and Information for the Tourist”)である。この部分は湖水地方の各地の見所を紹介するもので、初版の「第Ⅱ部」と扱う内容がある程度重なっている。だが紹介にあたっての姿勢には、大きな違いがある。以下具体的に見ていこう。

このセクションはウィンダミアから叙述が開始される。ワーズワスはあまり旅行者が訪れない湖尻やロリンソン岬(Rawlinson's Nab)、トラウトベック(Troutbeck)に触れた後で、この湖は湖上のみならず陸上からも楽しむべきだと言う。同様の見解は初版にも見られた。139ページの下から2行目からはアンブルサイドが取り上げられ、この地を起点にした馬や徒歩での遠出の目的地が、簡単に幾つかあげられる。だが初版では顕著であったアンブルサイドの変化を嘆く声や、感情のこもった景色の描写はない。その代わりに、遠出等についての情報は、グリーン(William Green, 1760-1823)の旅行案内を参照せよ、という注(140)(＃4)と、アンブルサイドからケジックへ向う道中でのライダル湖やグラスミア湖を見渡せるコースの紹介が加えられている(141-2)。(＃5)

初版ではウィンダミアに先立ちコニストンに触れられていたが、第3版ではコニストンとその周囲がウィンダミアの後にまわされている(142-4)。これはコース紹介が、穏やかなものから峻厳なものへと進むべきだという原理の記述(108-9)から切り離され、大部分の旅行者がケンダル経由であるという現状が第一に考えられたためであろう。(＃6) 145-7ページはワズデイルなど最深部を扱っているが、内容は簡単なコース紹介で、初版のスケイル・フォース描写のような、個人的発見を記録した印象深い箇所が含まれていない。(＃7) 同様のことはケジックからボロウデイルの記述にも言え、彼が言及しているのはクロウ・パーク(Crow Park)や牧師館など、ブラウンやグレイの文章によって知られるようになった観光スポットばかりである。(＃8)

このセクションの最後(147-55)ではアルズウォーターが取り上げられる。これは大筋で初版の44-6ページの転写で、この湖への二つのルートの後で、旅行者に知られていない谷筋の魅力が語られている。だが初版では旅行者になじみのない場所を紹介するのが方針であったから、アルズの谷筋を取り上げることは、全体の趣旨に合致していた。ところが第3版ではそのような方針は採用されていない。そのために谷筋の描写を導入するにあたってワーズ

ワズは、“the curious Traveller may wish to know something of its tributary Streams.” (149) という前置きを新たに挿入している。だがこの前置きと後続の谷筋描写には噛み合わないものがある。（#9）

ワズは谷筋の紹介にも幾らか修正を施しているが、そのなかにも注目すべき点がある。初版の概略で私は、グライズデイルからグラスミアへの道筋の描写を引用したが、そこには崇高な実景に息を飲むワズを彷彿させるものがあつた。第3版でそのくだりは “A sublime combination of mountain forms appears in front while ascending the bed of this valley, and the impression increases till the path leads almost immediately under the projecting masses of Helvellyn.” (152) と、心情が表面にでないものには書き改められている。（#10）

以上より第2版と3版の、第1版の「第Ⅰ、Ⅱ部」や「未刊の案内」に対応する部分の特徴をまとめてみたい。

- C1) 湖水地方とアルプスの比較という、これまでに見られなかった話題や視点の導入。（#1、2）こうした国民の愛国心や優越感に訴える話題や視点は、当時の案内書にもかなり浸透していた。その意味でC1) はC3) に通ずる面を持っている。
- C2) 従来の旅行案内所などに縛られず、自分の体験や考えを述べようとする姿勢の後退。（#7、10）
- C3) 通常の湖水地方旅行に配慮した案内書の実状への接近。（#5、6、8）

## V

この章では第Ⅱ章からⅣ章で扱ってきたことを踏まえながら、「未刊の案内」を『湖水案内』の第1版から3版と比較し、ワズが「未刊の案内」を途中で放棄した経緯について考察する。そのためにはまず、彼がどんな構想のもとにいつ頃に「未刊の案内」に着手したのかを把握しておく必要がある。

ドロシーは1809年11月18日のキャサリン・クラークソン宛の手紙で、ワズが『湖水案内』初版の執筆に従事していること、その「導入部」（“the general introduction”）はこの地方の歴史や景観を正しく科学的に記録した唯一のものであると述べてから “I think, if he were to write a Guide to the Lakes and prefix this preface, it would sell better, and bring him more money than any of his higher labours.”<sup>10</sup> と言っている。ここでの “this preface” は「導入部」を指すと考えられる。この時点でワズの「第Ⅰ、Ⅱ部」執筆がどの程度進行していたのかははっきりしないが、ドロシーは「導入部」にしっかりした湖水地方案内書をつければ、相当の需要がみこまれると考えているのである。「未刊の案内」はこの構想の具体化を目指したものであつたと推定される。この推定に根拠を与えるものの一つは、「未刊の案内」に初版の「導入部」やそれに続く部分の存在を前提にしたところが相当あることで

## ワーズワスが「未刊行の旅行案内」で目指したもの

ある。(Bのb参照。)

以上の推定を裏付けとなるものは、「未刊の案内」の内容にも含まれている。私は本論では初版の「導入部」は詳しく取り上げなかったが、その冒頭でワーズワスは、お決まりのルートを辿る通常の旅行者は湖水地方固有の魅力に気付くことがない。そのために彼は、湖水地方の地形や、人間と土地の交流を述べながら、見逃されがちな景観美の紹介に努める、と言っている。「導入部」でのその具体的な現れは、他の旅行書が関心を払わない小湖の記述(x-xi)や、雪景色のみごとな表現などである。この姿勢は「第Ⅰ、Ⅱ部」でも維持され、通常の人々が訪れない場所に存在したり、近くにあっても気付かない自然の魅力を大事にする姿勢や通常のツーリズムへの批判的態度となっている。例えばワーズワスは、通常の旅行案内がよく取り上げるアンプルサイドからケジックへの道中の見所の紹介などはやっていない。また、ウィンダミアとダーウェント周囲の眺望点の取り上げ方も特異で、わずかにウィンダミアの第1眺望点の改良に対する批判があるだけだし、アルズウォーターの記述も通常の旅行案内とは全く異なり、観光スポットではなく人目に触れない谷筋ばかりに焦点があてられている。私は第Ⅱ章の末尾でこうした特徴をA1)、A2) にまとめておいた。このような従来の案内書などに縛られたくないという姿勢は、A3) にあげた、自分の体験や心情の重視と表裏一体をなすものと考えられる。

初版のA1)、A2)、A3) は明らかに「未刊の案内」のB5)、B4)、B6) に対応している。このことは初版での湖水地方に臨む姿勢が「未刊の案内」でも維持、強化されていることを意味している。こうした内容面の類似性から、「未刊の案内」は初版の旅行案内的側面を一層拡充する目的で書かれたとみて誤りはない。B3) はこの目的を実現するためにワーズワスが先行書を一層研究したことを示唆するが、ここに窺える彼の意欲は「未刊の案内」に初版にはない要素と魅力を与えることにも繋がっている。具体的に言えば、B1) の追加は、外部から訪れる旅行者にとって湖水地方旅行の魅力をさらに高める便利なものである。またB3) とB4) はワーズワスは湖水地方に関わる文献に精通していることを示しており、そうした知識が「未刊の案内」の叙述に深みと味わいを添えている。その典型はウェストとの違いが際立つ\*13や、ティックルを踏まえたボロウデイル紹介\*25などであろう。B6) に含まれるものも、\*15、22などがよく示すように、A3) であげたものより体験や心情の率直な語りになっており心地よい。このような点から、「未刊の案内」は完成すれば相当にユニークで魅力的な案内書になったものと考えることができよう。

それではワーズワスは、「未刊の案内」の執筆にいつ頃着手したのであろうか。この点に関しては、初版と「未刊の案内」の比較から、この案内書は初版の完成からほどなくして書かれたと推定されている。その根拠の一つはアルファ・カークの描写の差異である。第Ⅱ章の§3に見られるように、初版におけるこの地点の紹介は教会墓地からの眺めである。とこ

ろが「未刊の案内」では\*9のように墓地の墓碑銘が引用されている。ワーズワスは1811年9月にアルファ・カークを訪れ墓地にも出かけている。彼が「未刊の案内」に追加したものは、この訪問で得たものであったと考えられるのである。<sup>11</sup>

しかしワーズワスは、初版の「導入部」と「未刊の案内」を結合して新しい案内書を出版する企画を、1812年暮れには中断することになった。その理由としてはどのようなことがあげられるのだろうか。オックスフォード版『ワーズワス散文集』の編者は、その大きな理由として金銭問題からの解放をあげている。<sup>12</sup> 初版の執筆経緯やクラクソンに宛てたドロシーの手紙から窺われるように、ワーズワスが案内書執筆を思い立った主たる動機は経済的なものであった。彼にとって次第に大きくなる家庭を維持する金銭を得ることが急務であった。これが彼を駆り立て先行書にはない魅力を持った案内書の作成に向かわせたのである。だが案内書に力を入れることは、彼のライフワークである大作「隠棲者」(“The Recluse”)の執筆を妨げるものであった。ロンズデイル伯爵は彼をこの窮状から救うべく、1812年に金銭的援助の申し出た。彼はこの好意を受け入れて「未刊の案内」を中断し、大作へと関心を向けたのであった。

「未刊の案内」は、こうして中断されるまでにどの程度まで進行していたと言えるのであろうか。この案内はB2)のaで指摘したように、湖水地方の四ヶ所しか扱っていない。またB2)のbとcにあげた項目から窺われるように、これから手入れが必要な箇所が相当含まれている。さらに、叙述にもむらがあり、文学を踏まえた凝った部分などとそうでない部分などに落差がある。このような点から、この案内は完成までに相当の努力が必要ないように感じられるかもしれない。だがここで忘れていけないのは、「未刊の案内」と初版との関連である。ワーズワスにとって「未刊の案内」は、初版を補充するような形で書き継がれたもので、初版の存在を前提にしたものであった。従って、「未刊の案内」で取り上げた場所が限定的だとしても、例えばバタミアからワズデイルや、アルズウォーター紹介のようなそれを補うものが初版に既に存在しており、両者を総合すれば、扱っている範囲は湖水地方のほぼ全域を網羅するようになるのである。B2)のbにあげた不備も初版と「未刊の案内」を一体とみれば解消される。こうして「未刊の案内」が未完成だという印象の大部分は払拭され、この案内は、完成までそれほど日時を要しないところまで到着していたと判断されるのである。

既述のように、ワーズワスは以上のような状態にあった「未刊の案内」の執筆を1812年に中断した。だが彼は『湖水案内』の企画自体を捨てたわけではなく、1820年以降第2版から5版までを出版することになる。ところが、第IV章の末尾にあげた第2、3版の特徴C1、2、3)は、初版や「未刊の案内」を特徴付けていたものとは大きく異なっており、これらの版は「未刊の案内」と同じ精神や構想で書かれたものではないと言える。その結果、第3版からは「未刊の案内」のB4、5、6)に含められるような、ワーズワス個人の経験や心情に裏付け



られた個性的な観察や見解が大幅に姿を消している。また『湖水案内』のなかに留まっているにしろ、最初に与えられたコンテクストから移されて、本来の魅力を失ったりしている。私は本論第Ⅱ章の始めで、『湖水案内』の初版は、景観と人間の関わりを扱う「導入部」と、実際的な旅行の手引きである「第Ⅰ、Ⅱ部」から構成されていると述べた。この構成は初版から5版まで同じなのだが、重点の置き方は変化している。「未刊の案内」は旅行の手引きにあたる部分を充実させようとする試みだが、第3版でワーズワスはその方向を自ら否定したのである。

現在ワーズワスの『湖水案内』として読まれているのは第5版だが、その旅行の手引きにあたる部分は貧弱で魅力がない。これは第5版が内容的に第3版の延長線上にあるためである。それではワーズワスは、「未刊の案内」を手許に置いていながら、なぜ『湖水案内』の魅力を殺ぐこのような大方向転換を図ったのであろうか。私にはその理由は三つあるように思われる。その一つには、彼が直接言及している。「未刊の案内」で彼は、自身が発見したすばらしい眺めを紹介してから、旅行者がそうした場所に予備知識なしに行くことができるのが望ましいと述べている（\*15）。これは案内書不要論にもつながる発言である。ただ、「未刊の案内」では\*15に続く部分で、旅行情報を与えることを必要悪だと捉える留保条件があり、この発言がその後の姿勢に大きな影響を与えることはない。だが第3版では事情が異なっている。この版でワーズワスは、数年前に湖水地方案内書に着手したが、予備知識を与えることが、読む人が景色に実際に接した時の喜びを損なうので止めたといった趣旨の発言をしている（#3）。これは「未刊の案内」の\*15を発展させたものだが、ここには「未刊の案内」におけるような留保条件がない。恐らくこれが、個人の意見や感想を抑え、必要最小限の情報しか提供しない第3版の叙述方法の背景にあったものの一つと思われる。

この変化のもう一つの理由として、第3版の140ページの注で言及しているグリーン著書の出版があげられるであろう（#4）。マンチェスター出身のグリーンは測量の仕事でファーンネスに出かけたおりにウェストと出会い、画家を目指す気持ちと湖水地方への愛情を吹き込まれた。彼は1800年からアンブルサイドに居を構え、湖水地方を歩き回り観察に裏付けられた絵を描くかわら、1819年には上下2巻900ページに及ぶ『新湖水地方案内』 (*The Tourist's New Guide, Containing a Description of the Lakes, Mountains, and Scenery, in Cumberland, Westmorland, and Lancashire*) を上梓している。この書の「序文」でグリーンは、ウェストに代表される従来の案内書は簡単に訪れることができる場所ばかりを取り上げ、奥地や未開地や、身近の絶好点を紹介していないと指摘し、その欠陥を埋めるためにこの書を執筆したと言っている。そして実際ワズデイルなどの奥地やラングデイルなどのこれまで旅行者の注目度の低かったところを、自分の体験も交えて念入りに叙述している。このグリーンの視点や執筆態度は初版や「未刊の案内」におけるワーズワスのものと一致している。しかも『新湖

水地方案内』は『湖水案内』のどの版よりはるかに大著で、内容も詳しい。

ワーズワスのこの書に対する意識はグリーンの大著の翌年に出版された『ダドン川ソネット連作、など』に早くも現れている。この書に収録されている、ダドン川を歌ったソネットの17番の注でワーズワスは、グリーンを引用して自説を補充しているのである（43-4, 47）。以上のようなグリーンの大著の性格と、ワーズワスのこの書に対する反応を考えると、第3版出版に際しワーズワスがグリーンと競う愚を避けようとし、それがこの版を初版や「未刊の案内」と違った方向に向かわせたとしても不思議ではないであろう。

第三の、そして最も大きい理由としてあげたいのは、『湖水案内』を構成する二つの部分の内部矛盾とその解消である。前述のように初版の「導入部」にあたるところでワーズワスは景観と人間の関わりや、景観に対する人間の責務を説いている。これは部外者の湖水地方への侵入を阻止しようとする姿勢に通ずるものである。それに対して、旅行の手引きを充実させることは、案内書の販売促進に寄与すると同時に、部外者の流入を招くことになる。ワーズワスが「未刊の案内」に着手した最大の理由は家計に関わるものであったが、ロンズデイル伯爵の援助などにより、この問題は切迫するものではなくなった。こうしたなかで彼は、湖水地方の自然を大切にす原点にもどり、手引きにあたる部分を魅力的するのを控えたのである。これも「未刊の案内」が日の目を見なかった大きな理由と想定できよう。

#### 注

<sup>1</sup> *The Prose Works of William Wordsworth*, ed. W. J. B. Owen and J. W. Smyser, 3 vols. (Oxford: Clarendon, 1974) 2: 287-348. なお、この書には恐らく『湖水案内』に関連していると思われる “The Sublime and the Beautiful” という原稿も収録されているが、本論では取り上げない。

<sup>2</sup> この点については *The Prose Works of William Wordsworth* 2:128; Mark L. Reed, *Wordsworth: The Chronology of the Middle Years* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1975) 323, 361参照。

<sup>3</sup> 「導入部」の内容については拙稿「ワーズワスの『湖水案内』、その三つの版の比較」『山形大学紀要（人文科学）』、第15巻第3号（2004）：57-62；「ワーズワスの『湖水案内』と湖水地方史の創造」『英文学研究』81（2005）：2-5参照。なお、初版のテキストとしては、『英国湖水地方への旅18-19世紀旅行記・案内書コレクション』、編集・解説 小田友弥、全6巻（ユウリカ・プレス、2008）の第6巻に収録されているものを使用している。

<sup>4</sup> この伝記は *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. E. de Selincourt and Helen Darbishire, 5 vols. (Oxford: Clarendon, 1940-1958) 3: 510-22に収録されている。また『逍遙』(*The Excursion*) の第7巻315-90行はウォーカー師を描いたものである。

<sup>5</sup> この詩は第3版144ページに収められている。作者はワーズワスのホークスヘッド時代の友人である。

<sup>6</sup> この処刑台にまつわることは『序曲』(*The Prelude*) の「時の点」に入りこみ（1805年版第11巻278-315

ワーズワスが「未刊行の旅行案内」で目指したもの

行)、イチイのある囲い込み地は「イチイの木の下の腰掛けに書き残した詩行」(“Lines Left upon a Seat in a Yew-tree”)の舞台となっている。

<sup>7</sup> 湖水地方にはシースウェイトという地名が二つある。このシースウェイトはボロウデイル溪谷のもので、ウォーカー師の小教会があったダドン川沿いのシースウェイトとは異なる。

<sup>8</sup> 第3版のテキストとしては*A Description of the Scenery of the Lakes in the North of England* (1822; Oxford: Woodstock Books, 1991) を使用している。引用などの末尾の数字は、このテキストでのページ数である。

<sup>9</sup> *The Letters of William and Dorothy Wordsworth III. The Middle Years Part 2 1812-1820*, ed. Ernest de Selincourt, rev. Mary Moorman and Alan G. Hill (Oxford: Clarendon, 1970) 499-503.

<sup>10</sup> *The Letters of William and Dorothy Wordsworth II. The Middle Years Part 1 1806-1811*, ed. Ernest de Selincourt, rev. Mary Moorman (Oxford: Clarendon, 1969) 372.

<sup>11</sup> *The Letters of William and Dorothy Wordsworth II. The Middle Years Part 1* 509; *The Prose Works of William Wordsworth 2*: 128-29; Reed 480-81参照。

<sup>12</sup> *The Prose Works of William Wordsworth 2*: 130.

## What Wordsworth Aimed at in His “Unpublished Tour”

Tomoya ODA

William Wordsworth published five versions of his *Guide to the Lakes* during his lifetime. In addition to these, there are two important manuscripts related to the *Guide*, one of which is named “An Unpublished Tour” by the editors of *The Prose Works of William Wordsworth*, 3 vols. (Oxford : Clarendon, 1974). Wordsworth seems to have been engaged in writing this tour during the first and second versions, provably from 1811 to 1812.

The “Unpublished Tour” has many interesting characteristics that distinguish it from other versions of the *Guide*. For instance, in this tour Wordsworth invites the reader to the places that are not mentioned in ordinary guide books; his points of view and opinions about the Lakes scenery or customs of the people are often different from those of other writers of guide books. It is evident that he had intention to incorporate this tour with the *Guide to the Lakes*. But Wordsworth stopped writing it by the end of 1812, and the principles he came to employ in the later versions of the *Guide* are different from those in this tour.

In this paper I will investigate what Wordsworth aimed at in the “Unpublished Tour” by comparing it with the versions of his *Guide*, and other representative guidebooks of his days. This will contribute to making clear some aspects of Wordsworth’s ideas about the function of guide books.